

蜘蛛の仕返し

樋本 知紀

僕は一年生の弟がいて毎日日学校へ連れて行っている。ある朝玄関を出ると弟が

「蜘蛛がいる。」

と言つて後ずさりして前に進まない。

弟が指差す先に小さな蜘蛛が網を張っていた。仕方なく玄関横にある竹ぼうきをもつて、蜘蛛を巣ごと叩き落とした。

やつと弟も学校へ向かつて歩き出した。

家に帰つて夕食後、宿題をしていたが急に外の空気を吸いたくなつて玄関を出た。テラスの柱に持たれて帳の下りた静寂の庭を眺めた。

門灯に映し出された庭木の枝が影絵の如く思へて胸に刻まれる。枝から一本の糸で垂れ下がった蜘蛛が妙に脳裏に突き刺さる。

突然小さな蜘蛛の後ろから巨大な蜘蛛が現れた。

巨大な蜘蛛は僕を飲み込むかのように大きな口を開け今にも飛びかかろうと身構えている様にも思へた。

と同時に蜘蛛の口から太い糸が吐き出されて、その糸は生き物かの様に伸びてきて、柱に持たれている

僕の両腕と身体を柱に巻きつけた。

僕は巻き付いた糸を振りほどこうと腕と体を精一杯動かそうとしたが、糸は粘り気のある粘着テープの様に食い込みビクともしない。蜘蛛の糸は僕の肩から順次下へ寸分の隙間も造らずグルグル巻きにしていく。

僕の額からは脂汗が頬を伝い下へ流れ落ちる。大声で助けを呼ぼうと一生懸命声を出そうとするが、一言の声も発する事が出来ない。

僕が苦悶にうごめいている時も一瞬の休みもなく、蜘蛛の糸は僕をグルグル巻いていく。足首まで巻き終えると、今度は順次上に向かっていく。

肩を超えた時、僕の首を締めるかの様にきつく巻き付けてくる。苦しい。息が出来ない助けてくれ。

声を絞り出そうとするが声は出ない。意識は朦朧としてくる。息絶えた後あの巨大蜘蛛に食われるのだ。だんだん意識がうつろになつていく。首や体を縛られていた痛みが嘘のように感じられなくなった。

庭の美しさを感じていた眼も開ける事の出来ない暗黒の静寂さだ。死を実感する。せめて卒業証書を……。